

(全国水源連情報)

「ゲリラ豪雨ではダムは機能しない」 間違いだらけの水害対策〈週刊朝日〉

10月25日、台風21号の影響を受けて関東や東北を中心に豪雨となり、千葉県や福島県などで浸水被害が相次いだ。各地で川が氾濫（はんらん）し、避難勧告や避難指示が出された。福島県の高の倉ダム（福島県南相馬市）では、ダム決壊を防ぐための緊急放流が実施された。この大雨による死者・行方不明者は10人を超えそうだ。

千葉県では、半日で1カ月分を上回るような大雨となった。土砂崩れもあり、千葉市内では住宅が押しつぶされ、住民が亡くなった。茂原市では市役所周辺が冠水した。市の職員がこう証言する。

「市役所の目の前を流れる豊田川の水かさが増してきて、25日正午過ぎに橋の高さを超えました。その後、じわじわ水位が増して住宅地に浸水してきました。市役所の近くにある公民館に住民の方々が避難していましたが、午後4時半過ぎには公民館が床上浸水し、停電しました。住民の方々は、公民館から市役所に再び避難する事態になりました」

このように今回の大雨では、各地で急激に川の水位が上昇し、浸水するケースが目立った。上陸から2週間たった台風19号の被害も大きかった。全国で死者・行方不明者は90人超、河川の堤防決壊は140カ所に上り、住宅被害は床上・床下浸水を含め計7万棟を超えた。

繰り返される水害にはなすすべがないようにも思えるが、安倍晋三首相がよく言うように「国民の生命と財産を守る」のが政府の役目。台風19号では行政のミスや水害対策の遅れが発覚しており、責任が問われる。

台風19号では茨城県内の那珂川で、国土交通省の職員が水が堤防を越えているのを確認しながら、「現場が混乱していた」などとして、氾濫発生情報を出していなかった。

長野県飯山市では避難勧告が遅れ、河川の氾濫から数時間後になった。ほかの自治体でも住民に情報が適切に伝わらず、避難が遅れるケースがあった。財政悪化などを口実に水害対策が先送りされてきたことははっきりした。国交省の資料によると、治水事業等関係費は1998年度には2兆円近くに達したがその後減少し、ここ数年は1兆円前後となっている。

国交省によると河川整備計画で堤防が必要なのになかったり、基準に達していなかったりするところが、今年3月末時点で3割もある。予算不足や用地取得に時間がかかっていることなどが理由だ。堤防整備は水害対策の基本なのに十分には進んでいない。

ところが、ネット上を中心に、東京都心などで大規模浸水がなかったのはダムなど巨額の治水工事のおかげだといった主張が流布された。民主党政権で「コンクリートから人へ」のスローガンのもと公共工事が抑制されたことを批判する意見も目立った。実際は自民政権下でも抑制傾向は続き、治水事業等関係費は今でもピークの半分ほどだ。

建設中止問題が注目された八ツ場ダム（群馬県長野原町）を称賛する動きもある。国交省は利根川の越水回避に役だったとするが詳しい検証はこれから。大熊孝・新潟大学名誉教授（河川工学）はこう指摘する。

「八ツ場ダムが本当に利根川の氾濫防止に機能したのか、下流のピークをどれだけ抑えられたのかの検証はこれからです。台風19号では全国各地の河川で堤防が決壊し、地盤が低いところが激甚な被害を受けました。特に、長野の千曲川が決壊した箇所は、70メートルにわたって堤防が低くなっていました。なぜ、もっと早く堤防を改修しなかったのかという問題も、これから明らかにされなければなりません」

今回、千曲川が破堤したところは、過去に何度も氾濫を起こしている。過去最大は1742年に起きた「寛保2年の大洪水」で、氾濫水位は5メートルを超えていた。新幹線の車両基地は2メートル盛り土して排水ポンプも備えていたが、新幹線120両が水没してしまった「治水対策は堤防の強化が基本で、ダムでは水害は防げません。大型台風の襲来やゲリラ豪雨が頻発しており、堤防からの越流水は避けられないのかもしれませんが、絶対に破堤させないことが肝心なのです。堤防が決壊すると被害は一気に拡大します。近年、水害によって多くの高齢者の方々が犠牲になっていることを、直視しなければなりません。避難しようにも逃げられない、寝たきりの人もいます。そういうことも考慮しながら、河川の技術者は堤防設計をしなければならないのです」（大熊氏）

八ツ場ダムや吉野川可動堰（ぜき）など、治水問題に関わってきた武田真一郎・成蹊大学法科大学院教授（行政法）も、ダムには懐疑的だ。

「近年のようなゲリラ豪雨では、ダムは機能しません。すぐに満水になってしまい、緊急放流しなくてはならなくなる。かえって水害の危険が高まるのです」

実際に2018年7月の西日本豪雨では、愛媛県の肱川上流にある野村ダムなどが緊急放流し、広範囲な浸水被害を起こした。武田氏が続ける。

「さらに問題なのは、上流から土砂がダムに流れ込んで起きる『堆砂』（たいさ）が、進んでいることです。多くのダムが堆砂によって容量が少なくなっているのです。八ツ場ダムはたまたま試験貯水中で空っぽに近かった。もし通常運用で水がたまっていたら、緊急放流で洪水になる危険性があった。堤防強化は比較的簡単にできるのに、国や自治体は巨費がかかるダム建設を優先しています。堤防強化は利権にならないから、魅力がないということなのでしょう」

水害を防ぐには、ほかにも森林保護や川の浚渫（しゅんせつ）、下水道の整備などやるべきことはたくさんある。こうした対策が十分なされてこなかったことが、「国民の生命と財産」を危うくしている。

相次ぐ被害でわかった“間違いだらけの水害対策”。いつ被災するかわからない私たちが、正していくしかない